



コットンメール 61号

平成 23 年 1 月 25 日 発行

アイヌ衣装の複製に取り組む 10 人の女性

アイヌの伝統的衣装の製作に経験豊かな白老町の女性 10 名が、昨年 9 月からアイヌ民族博物館と北海道開拓記念館が収蔵する資料をもとに、計 20 点のルウンペを製作しています。

これは、平成 22 年度文化庁地域伝統文化総合活性化事業「アイヌ伝統的衣服の確かな継承促進事業」の助成を受けて行っているもので、昔作られた着物を忠実に復元することで伝統的技術や製作者の思いなども感じ、伝えることを目的としています。使われている素材や生地柄も、出来る限り似たものを探し、生地屋を 8 軒も回りました。中には元資料と同じイラクサの繊維を撚^よって糸にもしました。

元資料の刺繍の技法や縫い目、文様の形をじっくり見てみると、仕事の丁寧さ細やかさに驚き、奥深さを感じます。参加者は、自分で創作するのと違って、複製する難しさを感じつつも、少しでもフッチたちの手仕事に近づこうとやり甲斐^{がい}を感じているようです。帰る時間を忘れて夢中に製作している 10 名の方々の姿を見て、自らの手で伝統文化を継承しようという意気込みに感動しました。(きだみずえ)



カリフォルニア州立大学の大学院生が調査で来館

カリフォルニア州立大学院生の小池紗知子さんが、1 月 10 日～13 日の 4 日間来館し、当館の成り立ち、形態、そのほか、展示活動などについて聞き取り調査を行いました。

聞き取り調査を受け、小池さんの質問の端々には、当館への彼女なりの意見や独自性が見受けられましたが、このような若い人たちの外部の意見に耳を傾けることも大事だと思いました。

後日、小池さんからお礼の言葉とともに、次の感想が Eメールで届きました。

「今回、自身の卒業論文の為にアイヌ民族博物館を訪館させていただきました。そして、この博物館がアイヌ文化の復興と伝承の為に積極的に活動している事を知り、そこで働く皆様の一生懸命な姿に感動しました。小池紗知子」

当館にはこのように、諸外国からの学生や研究者が来館され、それぞれの目的に従った調査を行います。これも長い間のアイヌ民族専門の博物館としての実績が買われたものと思います。

今後も、来館者に博物館としての使命を果たしていきたいと思っています。(きだみずえ)



熱心に話を聞く小池さん

萩野中学校 2 年生、2 名が学芸員の仕事に挑戦！

12月2日と3日の両日、萩野中学校2年生の^{おたわりょう}小田和^{ごみかわきゆうと}怜さんと五味川球斗さんが学校の「職場体験学習」で学芸員の仕事を^{おたわりょう}選び、来館しました。

まず館内の清掃から始め、その後は学芸員の役割や博物館の機能のほか、アイヌ文化について学び、資料の登録や整理など、専門的な業務の一部も体験しました。

今回の職場体験の感想を、コタンメールの編集の練習として書いてもらいました。

五味川球斗さん 「12月2日～3日、アイヌ民族博物館で職場体験をさせてもらって、学芸員の木田さんと、村木さんが教えてくれました。この2日間で、色々学んだので今後の自分達の目標や、進路を考える上で貴重な体験となりました。」

小田和怜さん 「アイヌ民族博物館の職場体験学習を通して僕は学芸員のお仕事を学びましたが、学芸員はなんでもする博物館のプロだと教えてもらいました。展示室の掃除を実際やらせてもらってガラス、床、展示物など掃除をする場所がたくさんあって大変なんだなあと思いました。」

ムックリやトンコリの演奏の仕方を教わり、難しかったけれどとても貴重な経験になりました。館内見学などでもアイヌのことをたくさん知ることができました。今回の職場体験で学んだことをこれからの学校生活に活かし、将来の進路を選択したいと思いました。」

中学生がこのような学芸員の体験をすることは、博物館や学芸員の活動を、将来一般の多くの人たちに知られる基になると思っていますので、これからも多くの子どもたちが体験できる機会が設けられればと望んでいます。
(きだみずえ)



データベースへの資料登録に取り組む
五味川さん(左)と小田和さん(右)

担い手通信 白老アイヌ文化フェスティバルに参加!!

今年も伝承者育成事業研修生で白老のアイヌ文化フェスティバルに参加させていただきました。昨年11月に開催されたアイヌ語弁論大会イタカンローで最優秀賞を受賞した堀多栄子さんは、息子を背負いながら「イヌンケ（子守唄）」を歌い、山田美郷さんは息子の敏郎くんと親子で「ユカラ（英雄叙事詩）」を語ってくれました。

また、白老町内外から子供たち12人と「アイヌ語でクリスマスソング」に挑戦してみました。練習は2回と少なかったのですが、子どもたちはとても上手に歌ってくれました。クリスマスソング3曲をアイヌ語に翻訳するという作業はとても難しく、それを歌って録音するのも何度も録音しなおして、子供たちの練習用として配り、衣装を考え作成するなど大変なことがたくさんありましたが、それ以上に子供たちとこのような思い出を作れたことをとてもうれしく思います。子供たちにも良い思い出として残ったのではないのでしょうか？

このような場を借りて、少しでも私たちの研修の成果を紹介できたと思います。残り少ない担い手の研修ですが、これからもがんばっていきましょうと思います。

(きむらきよみ)



来場者と一緒にヘッチェ(合いの手)の練習!!
山田美郷さん(右)と息子の敏郎くん(左)



研修生がアイヌ語に訳した
クリスマスソングを子供たちと一緒に♪



息子を背負い、イヌンケ
(子守唄)を唄う堀さん